O1-45

情動障害患者の易怒性緩和に向けた関わり

木沢記念病院 中部療護センター

○青木 智子、和田 哲也、岩井 香織、浅野 愛子、槇林 優、浅野 好孝、篠田 淳

【はじめに】情動は 1. 感覚刺激の受容 2. 価値評価・意味認知(外刺激を有害・無害と判断) 3. 情動表出(怒り・恐れ・喜びなど)の3つの過程から成り立つ。交通外傷により前頭葉や大脳辺縁系損傷を呈した場合、これらの過程に支障をきたし、怒りなど攻撃性の情動が前面に出現することが多く対応に難渋する。しかし、中には情動表出に規則性があり、特定の外刺激に対して怒りの反応を示す患者がいる。そこで今回、外刺激量(声掛け・介助)と情動との関連性に着目し、易怒性緩和に向けた関わり方を検討した。

【対象】H20.5に頭部外傷受傷し，四肢麻痺，高次脳機能障害を呈した21歳の男性で6ヶ月後，当院入院。両上肢の随意性・筋緊張低下が著明で、重力を除いた状態で上下・左右へのリーチが可能なレベル。簡単な指示内容の理解は可能。訓練時、声掛けや触れるなどの外刺激に対し怒りの情動が出現し抑制が困難。

【方法】易怒性緩和に向け、触覚刺激(介助)、聴覚刺激(声掛け)の量を3段階に分類し、パターンごとに訓練時の様子の変化を観察。

【結果・考察】聴・触覚刺激が最大となると怒りが著明に出現し抑制困難となり、刺激が最小となると反応が得られず訓練参加への動機付けが行えなかった。しかし、部分介助かつ時折声掛けのある状況下では易怒性緩和が得られ訓練参加が可能となった。また、外刺激に対する耐性が向上し、訓練継続時間の延長・介助量軽減をもたらした。作業療法を実施する中で、介助や声掛けは欠かせないが、本症例では外刺激量と情動には関連性があり、時に刺激が有害となり怒りの情動表出を助長してしまう可能性が示唆された。